夕刊 磐城新聞

二月十四日發行

定價 一部金五錢 一ケ月金六拾錢(郵税拾五錢)
廣告料金 …… 五號十二字詰一行 ……
編輯印刷兼發行人 …… 福島縣石城郡平町 ……
發行所 磐城新聞社
(日曜祭日翌日休刊)

忙中雜記

白木草尾

○土井晩翠翁を迎へて

『土井は今までツチヰと呼ぶのが本當なんでしたがどうも私を訪ねて來る人や交友關係など、一般には土井と呼ばれる場合が多く、一方また仙臺辯から考へてもツチヰといふよりはドヰといふ方が呼び易いので――これはまア多數決のやうなもので、爾來土井といふことになりました』

十一日の晩、谷口樓での歡迎會席上、晩翠翁は諧言の混らないユーモラスな口調で、いはゆる改音屆の由來を語られた

私は、その日高久晩霞先生からのお電話で、石城の歌壇人の一人として晩霞先生に隨行の形で計らずも歡迎會の末席を汚し、翁の教へ子や學士會及び仙臺關係の人達と共に、翁の謦咳に接し、翁の風格に親炙して心から御歡迎の意を表したのであつた

天地有情の夕まぐれ
わが滕鬱の夢さめて
風棲いつか跡もなく
……

今はどうか知らないが、詩人晩翠の『暮鐘』の一節は古い中學生にとつては、時には試驗問題ともなつてなが〳〵思ひ出が多い

その土井晩翠翁―翁と書いても多分笑つて領かれるだらうと思ふが、全く突然に平町へ來られたと聞いて、私は、とう〳〵お出でになつた――とひそかに期待の外れざるを喜んだ

言ふまでもなく、平町には、古い教へ子の大森勇氏が今尚師弟の誼を以て寒暑の禮を欠かさず、頃日また磐城高女の校歌も、同氏を通じて晩翠翁の手になつたと聞いてゐる。翁としてもまんざら緣りのない土地ではないので、私は、必らずや一度はお出でになるやうな機會があるかも知れないと心ひそかに思つてゐたのであつた

明治三十年當時の我が國詩壇勃興時代、新體詩運動によつて島崎藤村翁など〻共に、晩翠翁の本邦文學史上に印した足跡は實に華々しく、且つ偉大なものであつた

今では、やはりなつかしい思出の詩であるが藤村が

小諸なる古城のほとり
……

を作れば、晩翠は

春高樓の花の宴
……

で、不朽の作品を殘してゐる。私は詩壇についての知識は全くゼロであるけれども、當今の詩壇と比べて、藤村當代、晩翠時代の詩壇は、大衆からの親しみが非常に深かつたのではなからうかと思ふ。萬天下の子女を熱狂させるだけの大きな魅力があつたのだらうと思ふのである

一つの田舍町に過ぎない平町にも、一時代を劃した詩人晩翠の杖を止めしむる事を得たことは、同好の士にとつて洵に喜びに堪えないものがある。いさゝか賦して晩翠翁の健在を祝福する所以である

磐城歌壇

新妻久滿夫選

寒日唱(1) 佐藤清長

◎置き忘れし福壽草かも大霜にうたれてあれば心悔いらる
◎初雪はあらゆきならむ山に見し昨日のゆきは山肌に解ゆ
○かへらざる古きいたみの想へごと手に捉へよと近々に浮む
○灯の流れ湯氣にこもりて鉢植の梅の蕾は赤く映へ居り
○夜の路を更けては人のさらになくふきほひて吾れは歩めり

寸評 實に良い歌境を捉へてゐるが、詠嘆に過ぎると反つて壞してしまひはせぬかと思ふ。一首、二首は佳い歌であるが、二首『初雪は』の歌は時間的に於て一層助動詞の用ひ方に注意を要する。

赤井嶽へ

磐女校友會誌 かをりから

一年 菅野文子

先生が教壇にたつて『明日は遠足です』とおつしやつた。私は喜んだ。皆も嬉しさうだ

翌朝起きて見ると空は淡青色にすんで氣持がよい。學校へつくと皆の顔は喜びにみちてゐる。八時三十分出發した。氣持のよい田にかこまれた道を元氣よく足を運ばせた。よいお天氣である。あたりは紅葉した木々に秋の光があたつてゐる。山のふもとまで來た。山をのぼりはじめた。道にそうた草木は皆美しく色どられてゐる。だん〳〵足がだるくなつて來た。道のすみにあつまつてゐる落葉をかさ〳〵とふみ〳〵足を運ばす上るにしたがつて海次第にあらはれてくる

やつと本堂にたどりついた。石段をのぼらうと思つて足をあげようとしてもつかれてしまつてゐる。でもやつとのぼつて、草の上に腰をおろした何げなく向ふを見渡せば、山がかさなりあつて、たくさんの煙突の煙りが勢よく空高くのぼつてゐる。炭鑛らしい煙色が何處ともなくあらはれてゐる。はるか向うをながめると海が金色に輝きわたつてゐた

私達はこの美しい壯快な様子を眺めながら日あたりのよい所でおべんたうをおいしくたべた。あたりには杉がすく〳〵とのびてゐる。何とのんびりした景色だらう。あたりには生徒がたくさん喜びにみちた顔をして群がり遊んで居る

○。。×。。○
○。。×。。○

潮聲硯靜抄帳

雜詠 赤羽松堂選

山茶花の花とこぼるゝ雨雫 失名
野鼠の冬田をかける夕かな
銀杏落葉掃く手をやめて仰ぎけり 枯萍
落栗や拾ふあとよりまた一つ
咲きゝつて山茶花こぼるゝばかりなり 一來
たぎる湯におどる湯豆腐挾みけり
水涸れて月の磧となりにけり 芳月
鮫川上流
谿川に大根洗ふ人見ゐにけり 茂堂
破れ蓮や靜かにひかる水の面 眞砂常
仰ぎ見る椋の大樹や冬の月 竹羊

2月15日

△應神天皇崩御(同天皇四一)△僧歌人西行法師入寂(建久元)△一木宮内大臣辭任し後任に湯淺倉平氏任せらる(昭和八)△多門中將逝去△濱松飛行聯隊重爆十一號機、夜間飛行演習中墜落搭乘者慘死(同九)

その日〳〵

○

淡雪の消えた土の上に路の草が小さな芽をふいてゐた。早春の日ざしの中に――。

講談 戸隱奇譚 山の怪秘 (109)

丸山寬雄作 眞木浪畫

碓氷峠

モツコ渡し(一)

神代の昔、日本武尊が東征の砌、この峠の絶頂に立たせられ、はるかに上總の海を眺められて、荒海の犠牲となつて投せられた其妃弟橘姫を思ひ出られ、吾嬬はやと嘆せられたところである

頂上には熊野權現が立つて峠の護り神となつてゐる苔蒸した玉垣、石段には鮮烈な色彩の歯朶類の草が、幅廣くはびこつてゐる、三千尺からの高地のためもあらう

空は紺碧、たゞ上總の邊と思はれる遠方はるか、層雲の波が望まれるだけである

この峠を輕井澤口から越す者は先づこの權現に詣でるのが普通である

いま、この石段に男女の旅人が腰をかけて休んでゐる

坂城の宿場で刈馬平七郎を助けた、尼僧妙心と、馬鹿彥である

『妙心様、俺はもう腹が減つたゝ何か喰ひてえな』

馬鹿彥は、妙心の荷物を片手でくる〳〵廻しながら妙心を顧みる

『も少しお待ち、この下へ下れば辨慶の力餅があるんだよ、それを食べさせて上げやう』

妙心は、杉の道中笠をとつて、汗を拭ふ、青く剃りたてた頭には手拭ひを冠せてあるから、一寸見ては普通の女である

『力餅、そいつは儲けたなはゝゝゝ』

馬鹿彥は、食氣が何より樂しみといつた風情である

『お前は大体、馬鹿力があるんぢやないか、そこへ又力餅など食べさせるのは却て、爲にならないとも思ふよ、どうしようかね』

『冗談云つちや不可ねえ、今、妙心様が、この俺に食べさせるといつたばかりぢやねえか、うそをいふと佛罰覿面と、たしか常日頃仰有つてゐたぢやありませんか、ねゝ、妙心様』

馬鹿彥は、妙心にからかはれてむきになつた、馬鹿彥ながら相手の急所を突いてゐるのも皮肉だ

妙心は、さり氣なく微笑しながら、まぶしさうに陽の先を見上げてゐる、鳶の鳴音が、妙義の山頂あたりから響いて來た、他には音らしい音もない、峠を渡る微風が、往來傍の雜草を靡かせて行くばかり

嘗ては、善光寺大誓願尼僧頭を勤めたほどの天靈が、岡庭典膳とのざれ事が因をなして、今では宿無しの尼僧となり下つた、天靈こと今の妙心尼にとつては、確に痛事に相違なかつた。それでもお經の讀める有難さには、其日から食に困るといふことは無かつた。方方の村はずれにある、廢寺やこわれかゝつた庵寺に籠つてゐれば村人の法事や葬式には必ず呼ばれた。從つてお布施料も出る。始めのうちは、佛に使へる者の定石を踏む生活をしてゐたが、性來妙心の体內へ、あくどく植ゑつけられた情慾的な力が、妙心を絶えず變態的の方へ方へと驅り立てゝゐた。こんなことで馬鹿彥もその相手に選ばれてしまつたのだ

しかし、刈馬平七郎の出現は、それ以上どれほどか妙心の情慾を煽り立てたか知れない、蛇のやうな情慾とは、妙心の場合に適用される言葉であらう。この春戸隱村火の御子社境內で、果し合ひの結果、刈馬平七郎と匠士討ちになつた岡庭典膳、それを介抱するといつて私かにその傷口から生血をを嘗めたことは、殆と蛇か動物の所業に等しい。しかも尚ほ、殺生陀羅尼經を讀んで、瀕死の境にあつた岡庭典膳の生命を、起死回生に赴かせたことは、不可思議にして恐るべき事實だつた

鑛業株賣出

第一鑛業株(全額拂込)五分配當
相場二拾壹圓十錢位(利廻り年一割一步强)
公債買入レマス。
御報次第店員參上詳細御說明致シマス。

公社債株式現物賣買
角治株式店
福島縣平町田町五四 電話一七三番

舊初賣御禮

初賣御禮トシテ
「マツダ眞空管」
チ特ニ割引販賣イタシマス
此際御買ひ求め下さい。

日東商會
平町二丁目 電話四二八番

洋服は 髙島屋

注文並に既製品
高島屋洋服店
平町二丁目 電話三八六番

銘木ト建築木材ノ御用命ハ今一番勉强スル當店へ
內外銘木 建築材一式 便利一瓦
平町紺屋町
㊎織田材木商店
電話四六〇番
極優良材碁將棋盤アリ格安讓リタシ。

一月星豆炭
一八キロ一袋
金八十錢
平驛前
阿部石炭商店
電話三七番

ホシチエンストアー平支部
ホシ薬舗
石町三丁目三〇 電話四二九番

技術的見地一本では望み得ぬ平町の都計
近郊農村の實相を凝視せよ」と 某識者の專門家的見解

平町の都市計劃に對する近郊村落の態度は屢報の如く未だ必ずしもその歸趨を一にせず、內郷村の如き尙ほ考慮の餘地を剩してる處もあるので、其の去就が果して法規上計劃の遂行に對して如何なる効力を有するか否かは第二の問題とし今後の推移を刮目されてゐるが右は單に技術的見地からのみせず全國策的見地からする綜合的都市計劃たらしめ度い希望に出發せる當然の結果と觀られ、之の方面に對し該博な識見を有する某氏は次の如く語つた

數年前から農村の更生策として自給自足なる言葉が流行して來た。これは單なる流行と言はんよりむしろ近代の農村が都市との關係において置かれた地位から來る必然の痛切な叫びだ。これに對し昨今都市商工業者の間には反產運動なるものが擡頭して來てゐる。これは農村に近來漸く擴大されつゝある產業組合に對する都市商工業者の不滿に基く以上兩者の主張に關し、その是非善惡がいづれにあるにせよ、兩者がかゝる對立を見せ、しかもこれを調和統制する國策的綜合方針が樹てられないといふことはすこぶる遺憾なことで、この狀態は是非ともなるべく速かに改善せらるべきだ。これに對して或ひは『それと都市計劃とは全然別個の問題で、そんな問題を持ち出すのは都市計劃の何たるかを解せざるものだ』との意見もあらうが、しかし吾々の懸念するのはその點にあるのだ。そして吾々の希望するのはかゝる言をなさしめる都市計劃に關する基礎感念をこの際改めてもらひたいのだ。具体的問題について言へば、即ち農村救濟策に關してはその工業化が叫ばれてゐるが、これに對して如何なる政策をとるかは都計にいろいろな意味で關係を持つて來る。また產業組合に關し今後どのやうな政策をとり、其結果都市商工業者がどのやうな立場に陷るかもまた考慮の中に入れなければならぬ。その他廣く兩者の利害調和に關しどのやうな政策をとるかは都市の發展形式、それと農村との關係規定等に至大の關係を持つて來る。兩者の間には現在すでにその傾向を見せ、今後ます／＼これを强め來らんとする諸多の關係があり、これを充分に考慮に入れた都市計劃でなければ、それを以て都市農村綜合本位の新都市計劃とはなすに足らぬ

年度末の切迫に各所工程を急ぐ
監督所激勵に大童

平土木監督所管內の昨年度農村振興町村工事は年度末を控え目下續々竣功するが今十四日現在に於ける進工狀況は內郷村の五千五百圓を筆頭として道路工事（二六ヶ所總工費四十萬五千圓）が進工中だつたが愈々五千七百圓の入遠野村を筆頭に田人、石住、箕輪、永戶、澤渡、三坂、川前の關係五村が終了した

夏井、高久、鹿島、磐崎、渡邊、植田、錦、上、入遠野、內郷、好間、永戶、四倉の十三ヶ町村竣功、河川は蛭田川（工費五千圓）の外三ヶ所工費一萬八千三百三十三圓が何れも八、九分通り進工、港灣も豐間の二萬八千圓を筆頭に三ヶ所七萬圓が約九分五厘程度の進工振りで其他縣直營の同上工事も總工費二萬九千圓の田人、入遠野、好間、平の四ヶ町村道路工事が何れも竣功、港灣工事も中の作外總工費六萬七千五百圓で目下浚渫に大童だがこれ亦約七、八分の進工であるが、これらの竣功期間は前者が今月末縣直營が年度內なので同所では小林所長以下連日督勵に汗だくである

第二小學校 母の日記念

平第二校では來月四日の母の日を期し校長訓話、學藝會その他で母性禮讃觀念の强調に力めることになり目下計劃中で當日は全校兒童に『母の日』と記したマークを附して趣旨の徹底を計ると

磐女生志望
師範二部最多

磐女校では此程今春卒業生百九十三名に就き再度の志望調査を行つたが、家庭入り依然最多を占め進學では師範二部最も多く醫專、藥專等も例年よりは多いと

早春の水戶笠間へ
鐵道で團体募集

既報―ジャパンツーリストビユーロー平支部新設により鐵道當局最後の主催とも見られる來る十七日(日曜)の笠間稻荷參拜、水戶梅見の團体は目下勿來―平間、赤井、小川鄉各驛から募集中であるが、當日は午前六時五分平發午後五三〇同驛着、臨時特別仕立、乘換なし、會費二圓五十四錢であると

負擔の公正を期し戶數割を是正
劃一的で無いが七十錢增

平町の十年度豫算は昨報の如く三十五萬圓を目標に目下編成中であるが、戶數割の算定は各方面の資料が整備せぬので未だ判然しないが大体各種事業などの關係もあるので昨年の一戶平均十七圓三十錢（總額八萬三千九百五十圓）に比し七十錢增しの十八圓見當に觀て居るやうだが、當局では平均額が多少上つても計算上の事で別して一戶必ず七十錢を增すのではなく平均額から觀れば各自稅額の增減は云爲出來ないと釋明してゐるが昨年度の縣下首要都市の平均額を見ると福島の二十四圓十四錢を最高に

中村一九、八八錢、郡山一八、七三錢　白河一八、七一錢　若松一七、六八錢

になつて居る

完納村表彰
郡下では五ヶ村

平稅務署では去る紀元節當日仙臺稅務監督局から表彰された國稅完納左記五ヶ村（昨年より一ヶ村增）に對し近く傳達式を擧行する

二七年―高久、二二年―豐間、神谷、六年―大野、鹿島

燒酎禍
銳利な剃刀で鑄掛屋斬らる
瀕死の被害者は好間生れ

好間村生れ鑄掛職正木勇一(四四)は十二日午後十一時半頃止宿先なる茨城縣多賀郡磯原町豊川町木賃宿板屋事高橋牛次方に於て同業東京市本所區生れ吉田繁彌(五二)と燒酎一升を平らげ泥醉口論の揚句、繁彌の爲め研ぎすました剃刀を以て咽喉部に瀕死の斬傷を負はせられ加害者は松原署大坪巡査に檢擧され取調をうけてゐる一方被害者正木は河井醫師の手當をうけてゐるが頸動脈を外れてゐるので餘病併發せぬ限り生命に別狀なき見込である

磐城セメント工務部長 目崎氏急逝
火防督勵中心臟痲痺を起す

磐城セメント株式會社取締役工務部長目崎恒男氏は昨十三日四倉工場出火監督中突然心臟痲痺を起し同日午後零時半遂に逝去した

明治三十六年東京高等商船學校機關科卒、直に日本郵船會社入り四十年迄一等機關士として歐米航路に從事、同年三月磐城セメント會社入社、大正八年四倉工業所長より同十四年四月湊工業部長に歷任、昭和五年五月以降工務部長として今日に至つた敏腕家で各方面から悼まれてゐる

郷土の史的時事解說（二）
白水阿彌陀堂の第二回修理
本堂宇の特別保護建造物並に內壇安置五佛像國寶各指定に就て（完）

勿來　生

かくて眞ひらは愈々出羽を攻めやうとして之に赴いた處、不幸にも其の途中で頓死して了つた。多分は急病の爲であらう。故に彼れの生存中は叔母の夫を討ち取ることが出來ず、一時戰は息すんでをる內、何日の間にか淸ひら、家ひらは義家に降屬してゐたので、義家は此の異父兄弟を信認するやうになり、眞ひらの領有した奧の六郡を半分、即ち三郡づゝ兩ひらに與へた。されば此の時、成ひらの受くべき地、即ち養父の跡は二人に奪はれた形となつた。併しながら之には何かの事情があつたであらう。是れに就いては今此に省き次節に論究する。然るに程經て家ひらは淸ひらに反し、其の妻子を殺したから茲に復た骨肉相戰ふことになり、淸衡は義家に附いて弟を討つことにした。既にして家衡は平鹿郡沼の柵（今の沼館町）に據つたので、義家は兵を發して彼れを攻めた。併し容易に破ることが出來ぬ。岩城(手の誤りかと)郡に住んだと云ふ武衡は此れを聞くや、當時奧羽民が最も畏敬してゐた義家に勝つて見せると、大いに誇り此所にやつて來て家衡を援け沼の柵を棄てさせ、金澤柵が夫れ以上の要害であるといふので二人り共其れに移つた

金澤柵とは今の羽後仙北郡金澤町の地と思はれ、當役の關係中は最も有名な戰場である。乃こで武衡、の家衡叔父、甥同士は之に據つて義家、淸衡、成衡等に反抗した。既にして義家の弟新羅三郎義光も亦兄を援けに下奧し、此の合戰に加はつてゐた。所が中々柵が堅固で容易に陷落出來ないでをつたが、遂に寛治元年（後三年軍記には、五年とあれど誤り）十一月十四日夜に至り、辛つと陷とすことが出來た

金澤柵の攻擊に際しては義家が雁行の亂れるを眺めて、其の伏兵のあるのを知つたことや、鎌倉權五郎景政の勇武、又は義家が剛臆の座を設けて將士を激勵し或は家ひらの乳母千任の事など種々樣々の記述があつて話は中々盡きない

早春禮讃賦

雪の消ゑた黒土の中から、草の青い芽がかすかに太陽を仰いでゐる。周圍の枯草は、その芽生を、まもつてゐるように風の子守唄を唄つてゐる、草の芽と太陽とそれはホイットマンの詩のような、かぼそい牧歌的な小景である。春はやがて、はなやかに訪れるであらうけれども、吾等は早春に言ひしれぬ美と憧憬とを持つ。わけても黒土の誘惑はどうする事も出來ない。彼は沈默であるだけ、强い大きな力を持つてゐる。いかなる苦しみも惱みも平氣で吸ひとつて了ふ。黒土の前には資本主義も、軍閥も、戀愛も、跡方もなくなるだらう。土と語り土と接吻する者にとつて早春ばまたとなきホームである。吾等は早春をたゝへる

再度の服毒で危篤
夫の家出を悲觀し
死魔に魅られた女

植田町本町三菅野ヨシヱ(三七)は去月旬下頃夫が無斷家出したので棄てられたものと早合點し自宅でバットの日を送つてゐたが昨十三日夜家出、今十四日午前十時頃湯本町常陸館に於てカルモチンを嚥下再自殺を圖り生命危篤、極度に神經衰弱

兩親を傷けた不孝者に六ヶ月
平區の原審通求刑

之はまた日本一の親不孝者の公判、去る昭和八年十一月二十八日夜實母トクさんを火箸で毆りつけ全治五週間の重傷を負はせたほか翌十二月父芳松を同樣火箸で毆打、さらに同月中又も父親に小井を投げつけ去る一月二十四日平區裁判所で傷害罪により懲役六ヶ月を言渡され之を不服とし控訴した平町立町九九電氣職鈴木始にかゝる傷害事件の控訴公判は十三日福島地方廷で中村裁判長、石合檢事係で開廷されたが石合檢事より原審通り懲役六ヶ月の求刑あつた、判決言渡しは來る二十日

金を呉れぬと愚圖る
藝者屋で凄文句を並べ
留置されたルンペン

ルンペン栃木縣宇都宮市中川原町生れ淸井高男(四九)は昨十三日午後二時頃平町銀治町藝妓置屋玉川事口府田直良氏方を訪れ金の無心に出たので家人が良き程にあしらつた處やをら居直つて凄ご文句を並べたので直に平署に引致されたが尙喚いて居るので留置場入り、今早朝來散々油をしぼられてゐた

檢馬成績優良

郡下に於ける二師團今年度馬匹檢査は去る六日の四倉を皮切りに昨十三日勿來町で終了したが受檢頭數三千七百五十頭の合格率は七五%の好成績に終始したと

湯本無盡創業十二週年

理學士鈴木康平氏を社長に比佐賢司氏を常務として地民無盡界に雄飛しつつある湯本信用無盡株式會社創業第十二周年記念大會は去る十一日の紀元節をトし午前十時より湯本議事堂に於て

開辭、綱領朗讀、訓辭、勤續社員表彰、記念品贈呈、祝辭

の順序にて擧行、正午閉會晝食、記念撮影の上午後一時より、日本一の稱ある大明無盡の專務にして理論實際兩方面に亘る斯界の權威者たる菊地休松氏の無盡精神に關する講演あり三時閉會、四時四十分から山形屋に於て懇親宴會を催したが出席七十餘名盛會であつた

病母からの哀訴に年期娘を戻さぬ主人
平署へ說諭方出願

平町月見町二七三三浦武次妹ツル(一五)は一昨年五月から五年々期百圓の約束で埼玉縣足立郡平方町大字平方醬油製造業石倉又右エ門方女中に住込んだが最近母が病氣のため雇主に再三歸宅方を願つても應せぬから今十四日武次から平署に石倉への說諭方を願ひ出た

。。。。靑沼町長上京

今十四日東京府會事務局で開いた東北振興聯盟發會式臨席のため

驛前鋪裝實地踏査

平驛兩三年來の懸案たる驛前廣場鋪裝は經費關係から接續縣道の鋪裝次第といふ條件で遷延されて居たが屡報の如き後藤驛長の猛申請により水戶運輸、保線兩事務所長が來る二十日頃取り敢へず實地調査する事になつた

。。。。畜病豫防打合

平、四倉植田三署管內家畜傳染病豫防打合會は既報の如く今十四日午前十時から平署會議室で開いたが、出席約五十名、永野縣農務課長の挨拶に次ぎ各署持寄りの議案に關し打合後農林省秋山技師の講演があつた

。。。。支柱夫重傷

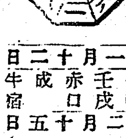
內郷村大字宮宇平太郎四二採炭夫三浦六之助(四四)は昨十三日午前八時頃同村宗像炭鑛坑內で作業中支柱に頭部を强打重傷を負つた

。。。。米專門泥公判

住所不定無職山形縣生れ前科三犯佐藤惣次郎(四二)が昨年十一月下旬以降去月上旬頃迄數回に亘り双葉郡熊町村原タネ方外數ヶ所から白米專門に窃盜を働いた事件は明十五日午前九時より平區で小林判事係り白水檢事關與公判開廷されると

十五日
（小名濱測候所調査）

日出　六、二五　月出後　二、二一
日沒　五、一八　月沒前　四、二二
滿潮　前四、三五　後一、三五
干潮　前九、〇五　後九、一五



舊一月十二日
金曜　壬戌　赤口　成　牛宿
新二月十五日

諸判定應需
東京市本郷區湯島四ノ日五番地
高島易斷總本部　神鸛館

▲一白の人　忍耐が肝要なる日人と衝突せぬ樣するが早▲二黑の人　人事は成るべく手を控へ獨りを愼しむべし▲三碧の人　力に餘る事に手を出す時は大敗を招くべし▲四綠の人　遠方の便りは當てにならず商事注意すべし▲五黃の人　固く現狀を守るべし進出すれば過誤失策す▲六白の人　不況に沈み居りし身も追々吉運に向ふべし▲七赤の人　宜しとて調子に乘るな早まれば泥田に陷る▲八白の人　和平專一とすれば幸福なる終日を送るべし▲九紫の人　進むも宜しけれども分限を越さぬ樣注意せよ

父堀江工業株式會社取締役社長江口忠一儀去月三十一日突然發病藥石効無ク二日午前八時五十分死去致シ候間此段御通知申上候
追テ過日不取敢茶毘ニ附シ十九日午後二時長橋町性源寺ニ於テ佛式ニテ葬儀相營ミ候
二月十四日
平町撥槌小路
男　軍二
親戚　江口淸
總代　堀江定一
堀江工業株式會社
代表　鈴木唯治

父目崎恒男昨十三日午後〇時三十分急病ニテ死去致候間此段御通知ニ代ヘ謹告仕候
追テ二月十六日午後一時ヨリ二時迄築地西本願寺ニ於テ告別式相營ミ可申候
昭和拾年二月拾四日
東京市淀橋區下落合一ノ四一四
男　鑛太
親戚　目崎忠之
高橋善一
鈴木淸秀
岩崎淸七
友人　木村淸治

當社取締役工務部長目崎恒男殿昨十三日午後〇時三十分死去致サレ候間此段謹告仕候
昭和拾年二月拾四日
磐城セメント株式會社